

## 女性たちの目が見据えるものは

中野 理恵

今月は2本の映画を紹介したい。『シリアにて』は、とてつもない緊張感と閉塞感に圧倒される作品である。舞台は、数十年に渡り内戦状態が続くシリアの首都ダマスカスのアパートの一室。映画はそこでの一日を描く。その一室で、中年女性オームは戦地に赴いた夫の留守を預かり、父親と3人の子ども、メイドのデルハン、若き隣人のハリマ夫妻と、彼らの赤ちゃんとの暮らしをしていた。

ある日、隣国レバノンの首都ベイルートへの脱出ルートを見つけたハリマの夫は、その手続きのためにアパートを出た途端、撃たれてしまう。一部始終を部屋の窓から見ていたデルハンがオームに知らせたところ、ハリマには知らせるなど口止めされる。ハリマが倒れた夫に掛け寄せれば、彼女も撃たれる、とオームは気遣ったのだ。昼間、その一室に強盗が押し入ってくる。ハリマは赤ちゃんのために、他の皆が隠れた台所に行けず、強盗の一味に強姦されてしまう…。

オームを演じるヒアム・アッバスはイスラエル生まれのパレスチナ人。活動の拠点を国外に求め、現在はフランス、アメリカを始め国際的に活動している。追いつめられながらも、家族や隣人を守り通そうとする強い意志を持つ女性を見事に演じ、見ているこちら側がハラハラするほどだ。ハリマ役のディアマンド・アブ・アブードはレバノン生まれ。不安な日々の中で、生まれたばかりの我が子を大切に、夫の安全を願い、その傍らに、とひたむきに想う若き母親役の熱演は記憶に残る。本作は、ベルリン国際映画祭を始め20近い映画祭で数多くの映画賞を受賞している。

『ヴィタリナ』も他に類のない斬新な作品だ。冒頭、真っ暗な画面に目を凝らすと、こちらに向かってくる人影がぼんやりと見え始める。映画は



◀『シリアにて』より  
©Altitude100 - Liaison  
Cinématographique - Minds  
Meet - Né à Beyrouth Films



『ヴィタリナ』より▶

いつの間にか始まっていた。本作ではどの登場人物の動きも緩慢で、冒頭から3分の2近くまでは画面が薄暗く、それだけで画面から目を離すわけにゆかなくなる。

アフリカ大陸のカーボ・ヴェルデからポルトガルのリスボンを訪れたヴィタリナの目的は、この地で亡くなり、既に埋葬されていた夫の生前を知ることだった。夫の暮らしていた移民街の部屋に滞在していると、思い出を話しに来る者、死に際を伝える者等々、立ち寄る人々は何かを彼女に伝えてゆく。そして、その暗がりの中で、ヴィタリナは自分の人生を語り始める。

ある日、ヴィタリナは近くの荒れた土地を耕し始め、路地の教会を訪ねる。教会での語り。次第に画面に光がさすようになり、牧師とともに墓参りをするヴィタリナ。明るくなる画面はヴィタリナの心象風景を映しているのだろうか。

作風は実験的だが、テーマは普遍的な〈人生とは何か〉ではないだろうか。魅力的で不思議な映画である。ロカルノ国際映画祭で金豹賞と最優秀女優賞を受賞し、世界的に高い評価を受けている。

### 《Cinema Information》

『シリアにて』 ベルギー・フランス・レバノン映画(86分)/監督:フィリップ・ヴァン・レウ/8月22日(土)より岩波ホールほか全国順次公開

『ヴィタリナ』ポルトガル映画(124分)/監督:ペドロ・コスタ/9月上旬よりユーロスペースほか全国順次公開

なかのりえ:映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館,2018)等。